

# ケイト・ヤングマンと慰廃園

青 山 静 子

はじめに

ケイト・ヤングマン (Kate Youngman, 1841-1910；日本滞在1873-1910) は、ニューヨークの米国長老教会婦人伝道局の宣教師として、1873年31歳の時、東京築地に長老教会の女子学校を創設するために来日した。ヤングマンは、10代の頃、アルバニーで出席していた日曜学校の教師であり、慈善福祉活動で大活躍し、宣教師として来日したメアリー・プトナム・プライン (Mary Putnum Pruyun, 1820-1885) の影響を受け、慈善福祉活動に大きな関心を持っていた。来日後、ヤングマンは教育伝道から次第に離れていき、慈善福祉活動に傾倒していく。

本論文では、ケイト・ヤングマンとメアリー・プラインの関係、ヤングマンが宣教師として来日することになったいきさつ、新栄 (しんさかえ) 女学校の女学生を集めて慈善福祉ボランティアグループ「好善社」を設立、津島八重という一人のハンセン病患者救済のため男性社員を入社させ、どのような資金調達を行ってハンセン病療養施設「慰廃園」を設立することになったのか、また、伝染病研究所北里柴三郎の患者受け入れに反対し激怒したヤングマンの心境を精査していく。舞台は、ヤングマンが大塚正心・かね夫妻に出会った御殿場の神山、ヤングマンが住んでいた築地外国人居留地界限、ハンセン病療養施設「慰廃園」を創設した目黒村である。ヤングマンのハンセン病患者救済はボランティアグループ「好善社」の活動であったため、必ずしも、ヤングマンが考えていた

五

通りの救済活動にはならなかった。また、ハンセン病者救済活動を行っていた同時期、日本キリスト教婦人矯風会の慈愛館を自宅に設置し、元娼妓たちを預かり、濃尾地震の孤児の養育も行っていたので、ハンセン病者救済だけに没頭することができなかった。ヤングマンが、もし一人で病者救済活動を行っていたら、彼女の活動は異なった形態になっていたであろう。

## 1. 慰養園の設立

### (1) ケイト・ヤングマン

ケイト・ヤングマンは、1841年12月17日、独学で学校教師となったオランダ系米国人ニコラス・ヤングマン (Nicholas Youngman) と、同じくオランダ系米国人マーガレット (Margaret) の次女として、米国ニューヨーク州キングストンで生まれる。ニコラスとマーガレット並びに子供たちは、判明しているだけでも、スタテン島 (NY)、アルバニー (NY)、キングストン (NY)、マンチェスター (NH)、ローウェル (Mass)、再びアルバニー (NY) と何度も住まいを変えている。ニコラスは、正規の学校を卒業しておらず、恐らく教師としての資格もなく、職探しに困難していたのだろう。家族を養うために、少しでも条件のいい働き口を探して、そのために引っ越しを繰り返していたのではないだろうか。ニコラスは金銭的に恵まれていたとは言い難いが、忍耐力があったようで、長年に亘り日記をつけていた。真面目で几帳面な性格だったと思われる。生活習慣も規則的で、熱心なキリスト教の信者であった。<sup>1)</sup>日本でのケイト・ヤングマンの伝道という職務に対する頑固なほど生真面でひたむきな態度、信仰に忠実な生活は父親譲りであったと考えられる。1850年8月24日国勢調査の日、家族はローウェル (Mass) に住んでいるが、54歳の父親ニコラスは無職である。母親マーガレットは44歳、子供たちは全員両親と共にいるので、7人家族である。16歳の長男ジョンは無職と記入されている。学校を卒業しても職が見つからなかつ

たのだろうか。次男ヴリーランドは10歳、次女キャサリン（ケイト）は8歳（長女の記載はない。夭逝したと思われる）。3男ジョージは6歳、3女エリザベスは3歳である。次男、次女、3男は学校に通っている。<sup>2)</sup> 収入のないこの大家族はどのように暮らしていたのだろうか。

ヤングマンが長老教会海外伝道局に提出した履歴書によると、子供時代の大半をマサチューセッツで過ごし、1855年13歳の時にニューヨークに戻るが、1856年14歳の時に母親が死亡する。母親が亡くなる時に、自分の死後は家族の世話をしてほしいと頼まれたので、ケイトは学校に行くのをやめて、家族の世話をする。その時、家族は父親、3人の兄弟、1人の妹がいた。1859年ケイトが17歳の時父親が亡くなる。（おそらく1860年）18歳の時に結婚する予定であったが、1861年4月南北戦争（1861-1865）が始まり、婚約者は南北戦争の激戦地アンティタム（Antietam）で戦死する。<sup>3)</sup> 1863年21歳の時に、当時「12番通学校（The 12<sup>th</sup> Street School）」と呼ばれていたが、のちに師範学校となったニューヨーク市の学校に行き、4年間在学し1869年に卒業、同年その学校の教師となった。<sup>4)</sup> 4年間教師として務めていたが、1871年ヤングマンの教会のバイブルクラスの先生であったミセス・メアリー・プラインが横浜に宣教師として派遣された。<sup>5)</sup>

プラインはアルバニーのオランダ改革教会ビーバーストリート・チャーチに属し、1862年に夫を亡くすが、富裕で大家族のプライン家の主婦として忙しい毎日を過ごしなが、教会の日曜学校の教師をつとめ、バイブルクラスを主宰して指導にあたっていた。<sup>6)</sup> 同時に教会の奉仕活動にも熱心で、1848年28歳の時、女性の更生を手助けする目的で「ハウス・オブ・シェルター」を設立。家庭の主婦を対象とした「バイブル・リーダーズ・アソシエーション」を始めたり、花と果物を入れた小さなカゴを携えて病人を慰問する「花と果物のミッション」も率先して行っていた。1861年南北戦争が開始されると、アルバニーやワシントンの病院に収容された北軍や南軍双方の負傷兵のために、食料や衣料品などの

必需品を調達して届ける奉仕活動のアルバニー責任者としてリーダーシップを発揮した。

1858年ブラインは「子供の友協会」を設立し、この協会を運営母体とする「インダストリアル・スクール」を開校し、1871年51歳で宣教師として日本に出発するまで、責任者として活動を続けた。この「インダストリアル・スクール」は、有志の献金と奉仕によって運営され、貧困家庭児童を集めて勉強を教えたり職業訓練を行ったり、食事から衣服までの世話をする学校で、男子と女子合わせて、75人から100人が在籍していた。

ヤングマンは、1855年13歳の時、ニューヨーク州アルバニーに家族とともに転居し、ビーバーストリート・チャーチに参加し、日曜学校の教師であったブラインの慈善福祉活動の一部始終を、1863年21歳でニューヨーク市の学校に行くためにアルバニーを離れるまで、8年間のあいだずっと目にしていた。

画像 1. 1871年5月20日（土）に *Albany Morning Express* 紙に掲載されたブライン一行の日本への旅立ちの記事<sup>7)</sup>

—Mrs. Samuel Pruyn, of this city, Mrs. Pier-  
son, of Chicago, and Miss Crosbie, of Pough-  
keepsie, started from New York for Japan by way  
of Chicago and San Francisco Thursday after-  
noon. A large party went down from this city to  
bid Mrs. Pruyn a last adieu. Previous to her  
departure that lady received from Mrs. M. Victo-  
ria Terhune—known in the literary world as  
“Marion Harland”—a check for one hundred  
dollars, contributed by the ladies of one of the  
Presbyterian churches of Newark, N. J., for the  
use of the Children's Home, which Mrs. Pruyn  
proposes to establish in Japan.

当市のミセス・ブライン、シカゴのミセス・ピアソン、ポーキプシーのミス・クロスビーは、木曜日の午後ニューヨーク市を出発し、シカゴ、サンフランシスコを経由して日本に向かった。当市からも大勢の人々が集まり、ミセス・ブラインに最後の別れを告げた。ミセス・ブラインが[アルバニーを]発つ前に、文学界でマリオン・ハーランドとして知られているミセス・M・ヴィクトリア・テルレーヌより100ドルの小切手を贈呈された。ミセス・ブラインが日本に建設するチルドレンズ・ホームのためにと、ニュージャージー州ニューワークの長老教会婦人会が寄付したものである。（筆者訳）

ヤングマンは彼女の影響を受けて、宣教師として日本に行くことを考え始める。7ヶ月間祈りを捧げ、熟考した末に、もし自分を宣教師として日本に派遣してくれる伝道局があれば日本に行こうと決心する。それから1週間も経たないうちに、4つの教会の伝道局から、連絡をもらう。<sup>8)</sup> やがて、ヤングマンはニューヨークの長老教会婦人伝道局から教育事業の宣教師の任命を受け、1873年5月8日ニューヨークを発ち、6月5日日本に到着。すでに築地明石町6番地の長老教会宣教師館で女子学校を経営していた宣教師カロザース夫人ジュリアの学校を手伝うつもりでいたが、必要ないと言われ横浜にとどまる。ヤングマンは、同年12月築地の同宣教師館に引っ越し、1874年1月メアリー・パークと共に女子学校グレハム・セミナリーを開校する。築地6番地に2つの学校があったため、ジュリアの学校はA6番女学校、パークとヤングマンの学校はB6番女学校と呼ばれた。初代校長はパークだったが、同年5月12日パークの結婚後はヤングマンが校長となる。<sup>9)</sup> 1876年ヤングマンは築地新栄町に新栄女学校（現・女子学院）<sup>10)</sup>を創設、校長に就任して移り住んだ。しかし、1878年、宣教団資金の使い途をめぐる、宣教団の男性宣教師たちと対立が起こり、新栄女学校の校長を辞退し、路傍伝道を始める。

1882年に出版された *Genealogy and Biographical Sketches of the Youngman Family* には、1880年代初頭のケイトや兄弟姉妹の職業などが記述されている。長男ジョン・アブラム・バーバンク（1834-）は1865年31歳の時に結婚、娘が一人いる。職業はエンジニアで、アルバニーに在住。次男ヴリーランド・ホーウォート（1839-）は1864年24歳の時に結婚、4人の子供がいる。アルバニーで石炭を扱う会社「レナード&ヤングマン」の共同出資者で、アルバニーに在住。次女キャサリン（1841-）は宣教師として長老教会伝道局により日本の首都東京に派遣されている。3男ジョージ（1844-69）は25歳の時に独身で死亡。3女エリザベス（1847-）は1876年28歳の時に結婚。夫はパン屋で、夫婦は

吾

ケイト以外に宣教師になった者はいない。生存している兄弟姉妹は全員結婚して家庭を持ち、アルバニーに在住している。生涯独身であったのはケイトだけであった。ヤングマンは1881年5月から1882年12月まで、39歳から41歳にかけて、また、1898年7月から1899年7月まで、56歳から57歳にかけて、一時帰国するが、アルバニーの兄弟姉妹と共に多くの時間を過ごしたものと思われる。

## (2) ボランティアグループ「好善社」(1877-) の発足

1877年(明治10)11月19日午後3時東京築地新栄町6丁目42番地「新栄女学校」にて同女学校の生徒9名とヤングマンが集会を開き、ボランティアグループを結成する。藤井里ん(りん)、笠井美志(みし)、納所里う(りう)、大鳥飛奈(ひな)、大鳥雪(ゆき)、加藤美知(みち)、相田嘉免(かめ)、菊竹波津(はつ)、佐藤梅(うめ)であるが、当日欠席していた竹村小安以(こあい)を社長(リーダー)、藤井里んを副社長、笠井美志を会計、佐藤梅を書記にそれぞれ選出した。<sup>11)</sup> 笠井美志の父親は笠井大五郎で、共義女学校(1876年(明治9)10月7日開業届け)の校主、みしは同校の教師だった。また、みしは新栄女学校でも助教師を務め、ヤングマンが始めた第2啓蒙小学校(校主・笠井大五郎)の教員も務める。<sup>12)</sup> 納所りうは、納所重兵衛の娘で、後日好善社に加わる納所すえは妹である。<sup>13)</sup> りうは、1880年(明治13)11月11日東京一致神学校を卒業し、明治12年閉校した三浦女学校の校主であった三浦徹(1850-1925)牧師と結婚して三浦姓となった。<sup>14)</sup> 大鳥ひな・ゆき姉妹は、元幕臣、榎本武揚(たけあき)と共に五稜郭で降伏、のちに明治政府に出仕(しゅっし)した大鳥圭介の娘たちである。<sup>15)</sup> 大鳥は、開拓使御用係、小議官、大蔵少丞(しょうじょう)、陸軍四等出仕を経て工部頭、工部技監、工部大学校、学習院長、華族女学校長などを歴任し、1894年(明治27)には枢密顧問官に就任した。娘のひなは1878年(明治11)5月14日上杉茂憲(もちのり)と結婚したが、後に離婚する。<sup>16)</sup> 相田かめは、

1874年（明治7）カロザース夫人のA6番女学校に入学し、その年の暮にカロザース宣教師から洗礼を受ける。<sup>17)</sup> A6番女学校が閉校した後、多くの在學生は、原胤昭により創立された原女学校（1876-1878）に転校するが、かめは新栄女学校に移る。6年間勉強したのち、1880年（明治13）卒業、同校英文科の第1回目の卒業生で、ただ一人の卒業生であった。卒業後は同科で2年間教鞭をとりつつ、日本学科も修めて1882年（明治15）卒業した。相田かめは、卒業の前後に、札幌農学校でクラークの弟子として「イエスを信ずる者の誓約」に署名した1期生である農学博士渡瀬寅次郎と結婚。<sup>18)</sup> 1883年（明治16）万国キリスト教婦人禁酒会からレヴィット夫人（Mrs. Levitt）が派遣され、木挽町（こびきちょう）厚生館で講演を行った時、トゥルー夫人に選ばれて通訳の任を果たす。佐藤梅は1885年（明治18）9月に開設された頌栄（しょうえい）女学校教員として裁縫・女礼・家政を担当した。<sup>20)</sup> 他の女性たちについては不詳であるが、『日本基督新栄教会史60年史』（1933）の会員名簿の中に、三浦りうや佐藤うめの名前と共に、藤井りんの名前もあるという。<sup>21)</sup> 以上の10名の若い女性は、いずれも15歳から20歳くらいと思われる。既婚者もいたかもしれない。相田かめは、グループ設立当時17歳であった。<sup>22)</sup>

グループの1年目の活動は、「松本せん」という少女の養育と学費の負担、日曜学校や啓蒙小学校で教えることであった。<sup>23)</sup> せんという少女は、母親がいるものの事情があって手元で育てられず、ヤングマンが引き取って養育していた少女で、当時8歳くらいと思われる。グループは、せんの養育費を得るために、裁縫や手芸で作品を作り、同年12月20日新栄女学校でバザーを開催し展示即売を行った。

1878年（明治11）9月より、品川台町、築地3番地、飯田町、本郷、芝の5カ所で日曜学校を開き、グループの女学生たちが教師となった。1879年（明治12）3月1日の例会にて、辻なみ委員が「社則」を読み  
上げています。1877年設立当初は名前のない女性ボランティアグループで

哭

あったが、同例会にてグループ名は「好善社」と決められ、入会資格は15歳以上のキリスト教女性信者とされた。キリスト教を親族や人々に伝え、日曜学校や集会を開いて、教えを広めることを主たる活動と規定している。ヤングマンは、このグループを通して民主的な組織作りや運営を若い日本女性たちに身をもって経験させようとしたと思われる。

ヤングマンは伝道局のローリー博士に宛てた手紙の中で、短い、力強い調子で、日本の教会のために、働き手となるクリスチャン女性を育てていく決意を伝えている。

東京, 1878年 9月20日

ローリー博士

(前略) 現在、東京には5つの教会が、品川には1つの教会ができています。どこの教会も、私が出かけて行って、地域の女性たちや子供たちを教育してほしいと言ってきます。教会の数は、これからも増え続けていくでしょう。私だけではとてもできません。でも、女学校のクリスチャンの生徒たちの協力があれば、やっていくことができます。私は、神の恵みの下で良い働きをしたいと思っています。私は毎日いくらかの時間を使って、クリスチャンの働き手を育てていこうと思っています。日本での優れた働きは、日本人のクリスチャンが行うべきであると信じて疑わないからです。  
(後略) ヤングマン (筆者訳)

1879年(明治12)10月7日より、ヤングマンは東京浅草教会で子供たちの集会を開き、キリスト教の話聞かせる。<sup>24)</sup>

女教師ヤングマン氏は東京浅草教会の会堂にて毎火曜日午後2時より5時まで近所の子供を集め教の道を聞かせる事を去月(きょげつ)7日より始められたる処追々盛になり同月28日などは70人ほども集まりたり『七一雑報』1879年(明治12)11月7日。

#### 四

ヤングマンは、こうした活動を継続していくボランティアを育成し、



確保していくために、女性ボランティアグループを結成する必要があったのだ。

女性ボランティアグループ好善社の最初の10年間は、社員たちが、自宅や教師をしている学校の課外活動として聖書を読み、祈りを捧げるといふ伝道集会活動が形成されていった時代であった。しかし、好善社設立から10年近く経った頃から、初代の社員たちの中には、好善社の活動から離れていく者がでてきた。創設当時は女学生であった社員はそれぞれ大人になり、伝道者や教師となって地方へ行ってしまうこともあった。

また、明治20年(1887)をすぎると、社会全体に、復古調を重んじる世相が表れ、キリスト教は排斥されるようになる。1898年(明治31)から施行された明治民法では女性の地位は極めて低く抑えられ、男性主導の家父長制が確立されていく。このような時代になると、女性が自発的にキリスト教の活動に参加すること自体が社会的に困難になっていき、例会は流会になることが多く、好善社は有名無実のグループとなっていった。

### (3) 好善社に男性社員入社

和田秀豊(しゅうほう)(1854-1946)が牧師を務める芝教会の会員に、小豆島出身のハンセン病を発症した女性がいた。津島八重である。同じ芝教会員で、1889年から神山中で伝道を行っていた大塚正心は津島を静岡県神中にあるハンセン病療養施設「復生病院」に入院させる。<sup>25)</sup> ヤングマンは、大塚正心が津島の世話で苦勞していることを知り、好善社で津島八重の世話をすることを計画し、好善社の組織を拡張する必要がある。そのため、1891年(明治24)9月2日ヤングマンは、貴山幸次郎、服部綾雄、真野文二、吉田森藏、阿知波浩を招いて相談し、男子の入社を申し入れた。<sup>26)</sup> 彼らは好善社に入社して協力をすることを約束し、ヤングマンに同社の規則の変更を託した。ヤングマンは、7日後9月9日の好善社総会で、11人の男性の入社を決議した。彼らは、プリンス頓神

哭

学校への留学（1886-1891?）から帰国したばかりの28歳の服部綾雄（1863-1915）、芝教会牧師で37歳の和田秀豊、新栄教会牧師で26歳の貴山幸次郎（1865-1940）、日本基督教会牧師で当時北海道紋別伊達教会の牧師であった31歳位の林竹太郎（1860-1924）、1887年服部綾雄の妹と結婚、91年明治学院神学部教師として、英学、万国学、動物学を担当することになった28歳の石本三十郎（1862-1896）、真野文二（生没年不詳）、吉田森藏（生没年不詳）、阿知波浩（生没年不詳）、伊藤為吉（生没年不詳）、51歳位のスコットランド一致長老教会宣教師ヒュー・ワデル（Hugh Waddel, 1840-1901）、30歳の米国長老教会宣教師ジョージ・P・ピアソン（George Peck Pierson, 1861-1937）である。真野文二、吉田森藏、阿知波浩、伊藤為吉の経歴は不明であるが、年齢は、他の日本人男性社員から推して、30歳前後であったと思われる、築地バンドのキリスト教徒あるいは日本基督教会聖職者であった可能性が高い。ヤングマンは49歳だった。日を改め、これらの男性社員を加えて臨時総会が開催され、規則改正を行い、社長に服部綾雄、副社長にヤングマンが就任、書記、通信委員、会計、評議員の役員を決めた。新たに定められた規則の第1条は「本社は、伝道、慈善、教育など総て主の栄光を顕（あらわ）す事業を以て目的とす」となっており、「慈善」という言葉があらたに加えられた。これは、ハンセン病者救済の慈善活動を表している。好善社は、「伝道部」、「教育部」、「慈善部」という3つの部門を設置して、新しいスタートを切った。<sup>27)</sup>後に詳述するが、津島を復生病院に入院させた時、復生病院の入院費は無料だった可能性がある。しかし、津島は復生病院に馴染まず、好善社では1891年12月の臨時総会で津島八重を千葉病院に入院させることを決定する。千葉病院では、津島が死亡すれば解剖を許可することを条件に入院費などの免除があったと思われる。しかし、諸々の費用の負担が必要だったのだろう。1892年4月ヤングマンは津島の諸費用を好善社が負担することを取り決める。しかし、津島八重は千葉病院で、解剖の恐怖を感じ始めたため、「好善社」はハンセン

翌

病救済施設をつくることを決定する。

#### (4) 静岡県御殿場神山伝道

1872年3月10日、日本はまだキリスト教禁教の時代であったが、米国オランダ改革教会宣教師J・H・バラ (James Hamilton Ballagh, 1832-1920) が仮牧師となり、日本最初のプロテスタント教会、横浜海岸教会が設立される。9月在日諸教会宣教師の会合が横浜で開かれた。その際、日本における教会設立にあたっては別々の教会ではなくひとつの組織を作り、名称は「日本基督公会」にすることが提案された。<sup>28)</sup> 長老教会と改革教会を中心とした日本基督公会外国宣教師が静岡県各地の伝道を始めたのは、1874年(明治7)あるいは1875年(明治8)の頃であった。<sup>29)</sup> 1877年(明治10)頃、箱根より三島に伝道の途中、山中駅の宿で伝道を行うと津田大作が求道者となり、翌年バラ宣教師より洗礼を受けて、横浜海岸教会員となった。1879年(明治12)御殿場の神山で伝道が行われるようになった。1880年(明治13)3月神山の信徒とバラ宣教師との話し合いによって、米国改革教会宣教師より現金120円を借用し神山講義所をつくった。場所は、津田の弟土屋喜平の粟畑であった。神山から北へ7.6キロメートル<sup>30)</sup>離れた御殿場で伝道が開始されたのは1882年(明治15)3月である。同年8月11日御殿場でキリスト教大演説会が開催され、講師を務めたのはバラ、フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898),<sup>31)</sup> 奥野昌綱 (1823-1910),<sup>32)</sup> 三浦徹たちであった(フルベッキの日本語の堪能さには一同驚いたという)。

1884年(明治17)5月神山の信者たちはバラ宣教師と話し合い、会堂を土屋喜平所有の近くの丘に移し、2階を増築した。2階はバラ宣教師が使用するようにして、毎夏夫妻は避暑のためにここを訪れた(神山講義所が建設されて以来、地租税及び県民税の一切を土屋喜平が負担した)。

1886年(明治19)春頃ヤングマンが神山に別荘を新築し、夏期は避暑のために神山を訪れて、伝道も行った。それから3年のち1889年(明治22)4月ヤングマン、大塚正心・かね夫妻が共に伝道のために働くこと

になった。正心は、バラ、ヤングマンと話し合い、改革教会宣教団の補助伝道士として、神山や御殿場で働いた。

1892年（明治25）5月6日御殿場劇場より出火した火災により御殿場講義所が類焼してしまったため、大塚伝道師は再び神山に住み込むことになった。この夏、避暑のため、多くの宣教師が御殿場近郷にやってきて、宣教師と教会の有志で福音小冊子を各戸に配布した。<sup>33)</sup>

当時神山にはハンセン病者を収容する「復生病院」があった。（現在も存在する。）復生病院が創設されるまでのいきさつは以下のようであった。

1873年（明治6）パリ外国宣教協会（Paris Foreign Missionary Society）から派遣されたフランス人カソリック宣教師テストヴィード神父（Father Germain Testevuide, 1849-1891）<sup>34)</sup> が来日する。1887年神父は御殿場に到着した。出迎えに来ていた御殿場在住の林久次郎青年と神父は、徒歩旅行のほこりと汗を流すために、御殿場の入り口を流れる鮎沢川の川端に下りていった。すると、近くの水車小屋の中から女性のすすり泣きが聞こえた。神父が近寄り、戸口から声をかけると返答があった。神父が中に入ると、薄暗い中に、30歳位の（実際は10代初め）女性がむしろの上にうずくまっていた。頭髪は薄くなり、むくんだ顔をあげて、神父を見上げた。女性はすでに目がみえなかった。彼女は、神父の質問に応じて、自分の身の上話を始めた。「この病気が発症すると夫は私を実家に帰しました。実家でも置いてもらえず、水車小屋に閉じ籠っています。一日に一度母が持ってきてくれる食事で命をつないでいます。何度も自殺をはかりましたが、死ぬことができませんでした。」と泣きくずれた。

神父は、現在の復生病院よりも北東に8キロほど富士山よりの鮎沢村に1軒の古い農家を借りて、この女性と5人の病者を救済し収容して、この小さな「病院」を「憐れみの宿」と名づけた。この近辺には在宅の病者も少なくなかった。しかし、近隣の住民から苦情が出て、ここに病

人を集めては困ると言われ、病院は一時解散する。翌年2月2日、神父は、病院設立許可をオズーフ（Pierre Marie Osouf, 1829-1906）教区長に願ひ出る。2月8日病院設立の許可が下りたので、現在の黄瀬川沿いの広大な土地を購入して病院を設立し、1889年復生病院が開設された。<sup>35)</sup>

1892年当時ヴィグルース（Francois Paulin Vigroux, 1842-1909）神父が病院長を務め、春にはベルトラン（Joseph-Jean-Augustin Bertrand, 1867-1916）神父が副院長として赴任。患者数は72名であった。<sup>36)</sup> その頃の復生病院はカソリックの修道院のようなもので、プロテスタントの信者も数人いた。プロテスタントの病者の中には、カソリックの方法に従っていけなくなり、逃げ出すものがいた。『富士岡村誌』（大正3年（1914）12月発行）<sup>37)</sup>には「高橋ノ附近ニアル日本基督教会講義所ハ、今ヨリ約三十年前以前、米国人ゼームルバラ氏ノ設置セルモノニシテ、最初ノ信者土屋喜平（二、三年前ニ死ス）ハ、最初自宅ニテ同宣教師ノ説教ヲ聞キ、一時仲々盛ナリシタメ講義所ヲモ設ケタレドモ、今ハ甚ダ振ハズ。只三、四家庭ノ信者ヲ有スルニスギズ。」とある。現在神山には高橋という場所は存在しないが、復生病院から南に500メートルほど下った所に、「高橋橋」があり、その回りに土屋という苗字の家が4軒ある。土屋喜平氏の次男が御殿場市で「そびや呉服店」を開業しており、土屋氏の話によると、高橋橋のたもとに講義所があったという（2006年11月17日御殿場市立図書館を通して聞き取り）。おそらく、プロテスタントの患者は、高橋橋たもとの土屋喜平所有の土地に建てられていたバラの講義所に逃げ込んできたのであろう（この講義所が、前述した丘の上の2階建ての建物であると推測される）。病者たちは、自らの境遇をバラやヤングマンに話したところ、宣教師たちは大いに同情して、プロテスタントのハンセン病患者のための病院をつくることを決意した。<sup>38)</sup>

## (5) 大塚正心・かね夫妻

大塚正心（1846-1926）は静岡県両替（現・静岡市両替（りょうがえ））で生まれる。父親大塚玄龍は幕府の典医であったが、後に本田美作守に仕えた。正心は父の業を継ぐため医術を研鑽、1863年開成学校（蚕書調所の後身）に入り、英語と蘭語を学んだ。維新後上京、子供の頃からの友人石原量からキリスト教を説かれ、1876年（明治9）東京基督公会（現・新栄教会）で米国長老教会宣教師デヴィッド・タムソン（David Thompson, 1835-1915）から洗礼を受けた（前述したB6番女学校の最初の校長であったメアリー・パークが結婚した相手がタムソンであった）。

大塚かね（1855-1945）は、1855年2月22日高橋盛吾・きよの次女として、福島県大笹生村（おおざそうむら）で生まれた。長女ひさは、かねより10歳年上で、社会活動家・ガントレット恒（1873-1953）及び作曲家・山田耕筰の母親である。かねは、1871年（明治4）正心と結婚する。かねは16歳、正心は26歳で、正心がまだ洗礼を受ける前のことである。恒の母親ひさは1877年（明治10）頃洗礼を受けるが、それは大塚夫妻がキリスト教伝道に燃えていたからであったと記されている。<sup>39)</sup>

住み慣れない東京で頼りにする良人は放蕩三昧なので母は一にも二にも妹夫婦（大塚正心・かね）を力にした。その妹夫婦が熱烈な伝道に燃えているようであったから、母が刺激を受けない筈はなく、明治10年頃であろうか。築地の教会のタムソン博士から洗礼をうけたのであった。ガントレット恒（1990）『七十七年乃想い出』, p.14.

1878年（明治11）恒子が6歳の時、大塚夫妻は恒子の父親の放蕩を見かねて、恒子を山田家から引き離して教育させるために、1876年（明治9）桜井ちか子が創立した麴町の「桜井女学校」に入学させ、寄宿舎生活をさせた。<sup>40)</sup> 大塚かねは、1885年（明治18）のちに音楽家となる一人息子淳（すなお）を出産する。

1885年（明治18）大塚夫妻はハンセン病者救済に打ち込むことを考え

ていた。夫妻が病者のための仕事に献身することを親戚に知らせた時には大反対され、殆ど絶交されてしまった。当時医師で開業していた正心は徹底的にハンセン病者の救済事業を行うには病者の霊肉共に救わねばならないとして、神学校に入学することを決心、かねもそれを勧めた。正心は伝道師試験に合格した後、1888年（明治21）妻子を残して単身鳥島に渡る。正心が鳥島に出かけた理由は、彼がハンセン病療養施設建設の第一候補地として鳥島を考えたからであるという。大塚かねから聞いた話として、鳥島の様子が以下のように記述されている。<sup>41)</sup>

大塚氏は療養所建設の第一候補地として考えたのは小笠原諸島内の鳥島で、氏は東京府の種痘醫となってこの島々を調査して巡つたのである。この無人島は以前難破した人が住んでいて破船でつくった八畳敷くらい的小屋や岩屋等があったが、その岩壁にその人たちの名や由来などが書きつけられてあった。それで見ると高知の人で4人船にのって出かけ嵐にあってうち2人がこの島に流れついたのである。然し、このような話はこらの島では別に珍しいことではなかった。いよいよ調査してみると飲料水がなく、それにブヨや悪性の羽虫が多くて刺されると、ひどく腫れるので非常に苦心した。氏がこの岩屋に最初入った時、鍋一つと、破れかけた新旧約の聖書が一冊置いてあったのでなにかしら一つの感動を得てこの島が気に入ったのであるが調査が進められるに従って療養所としての不適當を悟った。第一航海は沖縄に通う船が年に3、4回程より通らず、若し用事がある時はかがり火を焚いて船を呼ぶという状態で、少しでも風の強い時は全く無援の孤島だ、患者やその食料物資輸送の不便はこの上なくとうとう断念して帰京した。だが、翌年その鳥島の火山が爆発した。実に不思議にも死を免れたので、この時いっそう神の与え給ふ癩への使命を強ふしたのである。大塚かね(談)・宮川量(筆記)(1935)「不滅の榮光」、『愛生』、昭和10年5月。

大塚正心は、鳥島から体調を崩して引き上げてきて、静岡県御殿場の神山で伝道を始める。前述した通り、1889年（明治22）4月大塚夫妻はヤングマンとともに伝道を行なうことになり、正心は改革教会ミッショ

罌

ンの補助伝道師として神山や御殿場で働いた。大塚夫妻は自分たちのハンセン病者救済計画の参考にするために神山の復生病院をよく訪れていた。<sup>42)</sup>

## (6) 慰廃園の設立

和田秀豊（1854-1946）は宣教師ワデルの下で神学を学び、1881年日本基督教会の伝道師、84年に正教師となり、同年から芝教会の牧師として務めていたが、<sup>43)</sup> 前述した通り、小豆島から来た津島八重が礼拝参加者の中にいた。八重はその頃ハンセン病を発症し、同じ教会員で、神山で伝道に従事していた大塚正心がこれを知り、早速「復生病院」に入院させた。また、その他、2、3人の患者も同病院に入院させた。ところが、これらの患者たちは復生病院に馴染まず、病院から逃げ出して来るので、農家の一部屋を借りて彼らをそこに住まわせたり、また、東京芝の後藤昌文の病院や千葉病院に入院させたりしていた。大塚夫妻は病者たちのために困難すればするほど病者救済の思いは高まっていったが、いつも資金のことで行き詰まっていた。

1893年のある日、大塚正心がヤングマンを訪ねて、相談しているところへ郵送されたロンドンの新聞『タイムズ』(*The Times*)を一瞥（いちべつ）していたヤングマンが急に叫んだ。「大塚さん、与えられましたよ、もう大丈夫です。」それは、日本でハンセン病者救済に従事しようとする人には財政援助をするという「英国救らい協会 (Mission to Lepers: MTL)」の広告だった。ヤングマンはロンドンに行く人に手紙を依頼して MTL 本部に直接届けさせた。だが、手紙の返事よりも200ポンドのお金の方が早く届いた。1894年（明治27）のことであった。<sup>44)</sup>

MTL から出版された *An Inn Called Welcome: The Story of the Mission to Lepers 1874-1917* には、ヤングマンのハンセン病者救済活動について、以下のように述べている。<sup>45)</sup>



米国人の女性というのは、米国長老教会宣教団と共に、東京で働いているミス・ヤングマンのことです。彼女がMTLに助けを求めてきたのは1893年（明治26）でした。彼女は、キリスト教徒のグループと協力し、慈善活動のために好善社という団体を創設していました。会員の中には、大塚夫妻がいて、ハンセン病を発症し、社会的な差別を受けて救済を必要としている人たちのために献身をするという使命感を感じています。ミス・ヤングマンがハンセン病患者救済というパイオニア的な働きをするのは、大塚夫妻を励ますためでもあります。最初の患者は津島という女性です。この女性は、MTLからの資金で建てられる施設が出来る前に、必要な物資は与えられていました。けれど、彼女は一人で生活することはできず、死亡したら、遺体を解剖に使用するという条件である病院〔千葉病院〕に入院させてもらいました。ところが、彼女がなかなか死なないので、病院側では待ちきれなくなったらしく、彼女は文字通りどうしていいのかわからない状態になってしまいました。（筆者訳）Miller, A. Donald (1965) *An Inn Called Welcome: The Story of the Mission to Lepers 1874-1917*, p.80.

好善社は、MTLから寄付金が送られてくると、建設用地の選定を始め、鎌倉、熱海、大船、品川、目黒などを考慮したが、検討の結果、水清く、空気の澄んだ目黒村に決定した。<sup>46)</sup> 1894年（明治27年）5月目黒村鏑木（かぶらぎ）村長の斡旋もあり、東京府荏原（えばら）郡目黒村字下目黒に1,500坪の土地を購入し、同年5月23日千葉病院から津島八重を引き取り、とりあえず、この土地に建っていた物置に収容した。さらに、津島と前後して2名の男性病者西尾要吉と中西新三郎を収容し、大塚夫妻がこれらの患者と寝食を共にしながら世話をした。<sup>47)</sup> 好善社では、その後、病室を建築し、1894年10月13日正式に「慰糜園」（1894-1942）を開設した。1894年当時の好善社ボランティア・スタッフは以下の通りであった。<sup>48)</sup>

社長

和田秀豊

三

副社長	ヤングマン
会計	篠原銀蔵
調査委員	ワデル 嶋田セイ子
会計調査委員	一柳ちか
通信委員	
らい病院委員	貴山幸次郎 吉田森蔵 竹中マツ子 ヤングマン 守田ちゑ 小菅とき 篠原とみ 和田秀豊 菊池三郎 伊藤為吉
慰廃園監督	大塚正心
慰廃園監督補	大塚かね
慰廃園医師	北島剛三 <sup>49)</sup> 加治木勇吉

好善社（1978）『ある群像：好善社100年の歩み』、 pp.73-74.

MTLの前掲書は、1894年（明治27）のヤングマンの手紙を紹介している。<sup>50)</sup>

協会から為替が届きましたので、私は津島さんに、まもなく津島さんのために施設をつくってあげられそうだと書いて送りましたら、彼女は落ち着けるところがあると思うと嬉しくて、天国にいるような気持ちがすると返事をくれました。私たちが土地を購入した時に、土地には小さな物置がありましたので、そこに津島さんを住まわせることにしました。私たちの小学校〔ヤングマンの創設した啓蒙小学校のことか〕の子供たちがかれらの伝道貯金箱を開いて、必要な家具を買うためにそのお金を使ってくれました。うちにいる子供たち〔震災孤児たち〕も貯金箱を開けて、植木鉢に入ったバラの花のついた苗木を買いました。それで、津島さんの部屋は快適で暮らしやすくなりました。

津島さんは、千葉病院から船や人力車で東京へ移送する許可が下りませんでしたので〔籠で移送しましたが〕、朝8時から夜10時まで籠の中に閉じ込められたままでした。津島さんは今新しい住まいで楽しく過ごしています。薬草風呂に入れてあげていますので、もっと元気になることでしょう。

津島さんの次には、ハンセン病者の大工がやってきました。私たちの病室はひとつしかなく、そこで津島さんが生活をしています。私は、〔大工に〕材木と工具が買えるようにお金を渡し、私たちが建物を建築するまで、小

屋を作ってそこにいるように伝えました。彼を助けてあげる方法は他にはありません。それに、彼のあとから3人も申し込みがありました。私たちには、MTL以外に頼っていくところがありません。他のところから助けがあればいいのですが……。

私は、ハンセン病者救済という仕事がこんなに責任の重いものとは知りませんでした。でも、その責任は、決して間違いをおかさない神様によって私に与えられたものです。(筆者訳) Miller, op. cit., p.82.

ヤングマンは、1891年には築地B6番地の自宅に日本キリスト教婦人矯風会(矢島楯子会頭)の慈愛館をつくり、以来元娼妓たちを住まわせており、<sup>51)</sup> また、1891年10月濃尾地震がおこると、翌年3月、孤児5人をひきとって養育していた。<sup>52)</sup>

## 画像2. ヤングマンと濃尾地震震災孤児たち



出典：好善社(1978)『ある群像：好善社100年の歩み』, p.3.

ヤングマンの以下の手紙は、慰廃園設立から4年たった頃に送られてきたという。ヤングマンは、休暇のため1898年(明治31)7月から1899年(明治32)7月まで帰国する。帰国前の手紙だろうか。<sup>53)</sup>

男性患者用の新しい建物ができましたので、男性患者はそちらに移り、女性患者は男性患者が使っていた自分たちの家に戻り、今のところ、すべ

三

ては順調にいらっています。でも、1人か2人の使用人を雇ってあげられないのが残念でたまりません。使用人がいないので、大塚夫妻は雑用に追われて、自分たちの本来の仕事が充分にできないのです。ご夫妻は、信仰深く、献身的です。私はこの難しい仕事を始めるにあたり、神様が大塚夫妻のような立派な働き人を私たちに遣わしてくださったことを、毎日神様に感謝しています。クリスマスには、以前編集者だった男性患者が素晴らしいスピーチをしてくださいました。2人の学校教師が小文を読み上げてくれましたし、数人が上手に歌を歌ってくださいました。坐ることも立つこともできない男性患者がベッドに横たわって、部屋の角にいましたが、軽症の男性患者が、ベッドに横たわる男性患者に頼まれて書いた小文を読み上げてくれました。私たちは、次には、小さな教会が欲しいと思っています。礼拝参加者の数が増えてきましたので、部屋も家も人で一杯になり、礼拝が終わる頃には、すし詰めの状態になるのです。どのくらいの費用がかかるのか試算をして、お便りをお送りいたします。MTLからひとついただいで、またすぐにべつをお願いをして、私はたえずおねがいごとばかりで申し訳ないことです。でも、これは、神様が協会から私たちへの贈り物を祝福して下さっているあかしなのではないでしょうか。(筆者訳) Miller, op. cit., p.82.

## 2. ヤングマンの怒りと死

### (1) ヤングマンの怒り

前述した通り、ヤングマンは1899年(明治32)7月に米国から東京に戻ってくるが、ヤングマンが日本への帰路につく頃、東京ではヤングマンの想像もつかないことが起こっていた。1897年(明治30)4月「伝染病予防法」が公布され、1899年(明治32)東京愛宕下に内務省管轄の「国立伝染病研究所」が設けられて、北里柴三郎(1853-1931)が患者の治療や診察にあたっていた。20余名のハンセン病患者は「伝染病研究所」近くにある米屋の2階に下宿して、北里の治療を受けていた。北里はこれらの患者の隔離方法を思案している頃、目黒に慰廃園が設立されたことを耳にする。北里は和田秀豊の家を訪れ、米屋に下宿している患者た

ちを慰廢園で引き受けてくれれば、自分が慰廢園の顧問となってもよいという話をもちかける。和田は喜んで承諾した。<sup>54)</sup> 5月30日北里の使いとして村田昇清が同園を訪問し、それまで研究所で治療を受けていたハンセン病患者を收容し、世話をしてくれるならば、医療上の便宜をはかるという正式の申し入れを表明する。この件に関して、好善社では5月8日に臨時総会を開いている。<sup>55)</sup>

1899年(明治32) 5月8日午後3時ヨリ事務所ニ於テ臨時総会ヲ開ク出席者左ノ如シ

和田氏 ワデル氏 マコーレー氏 藤井氏 篠原氏 島田氏 藤原氏 大塚氏 宮澤氏 大鳥氏ノ10名ナリ(中略)

和田氏動議是迄北里博士ノ治療ヲ受け居ル、癩病人凡(およ)ソ20名ヲ慰廢園ニ入園セシムル事ヲ同博士ヨリ依頼アリ且ツ在園ノ患者ニシテ治療ヲ希望スルモノニハ喜ンデ医薬ヲ与ヘン事ヲ同博士ヨリ申出デラレタルニ付其希望ヲ容レテ之ヲ実行スル事而シテ慰廢園ヲ病院組織ニスル事可決好善社, op. cit., p.76.

こうして、慰廢園を病院組織とする動議が10名の社員が参加した臨時総会で可決され、5月30日には研究所の村田が来園、6月6日には北里と村田が来園し、6月8日には再び臨時総会が開かれ、集会者10名は全員北里の申し込みを受け入れることに賛同する。14日には病院組織設立願を東京府庁に差し出し、6月27日付けで東京府知事より「明治32年6月4日付私立病院慰廢園設立願之件聞届ク」という受諾書が届き、北里の患者約20名を受け入れた。

ヤングマンは、7月4日の臨時総会に出席するが、「ヤングマン氏慰廢園ノ患者ヲシテ北里博士ニ依頼スルハ不賛成」とあるように、慰廢園の患者を北里に治療してもらうことには反対した。好善社の記録には不賛成の理由は記載されていないという。しかし、1894年(明治27)慰廢園発足の時に、「本園は病院とは異なり、慈愛に富み給ふ全能なる神の

聖旨を奉戴（ほうたい）して憫然（びんぜん）なる癩患者を慰藉救養し且つ広く癩病患者に対し福音を宣伝するを以て目的とす。」とあるように、慰廢園は「病院」ではなく、全能の神の意志を受け、気の毒なハンセン病患者を慰め、キリストの言葉を彼らに教えることを目的としているのである。そのため、入園に関しては「入園せんと欲する者はキリスト教徒たるを要す。」と決めたのであった。<sup>56)</sup> ヤングマンが創設した「好善社」も「慰廢園」も全能の神に見守られながらここまで成長してきたのである。慰廢園は、慈愛あふれる神より与えられた聖なる施療所であり、ハンセン病患者を救い、慰め、彼らにキリストの言葉を伝える伝道の地なのであって、異教徒北里柴三郎も彼の患者も慰廢園に迎え入れてはならないのである。ヤングマンの失望は大きく、好善社の呼びかけにも拘らず、彼女はその後1年間好善社の例会には姿を見せなかった。しかし、ヤングマンは1900年6月9日の好善社総会に姿を見せて、従来通りの役目に復帰した。だが、ヤングマンはどうしても北里柴三郎に対しての不信感を払拭することができない。

1904年（明治37）3月22日の伝道局スピーヤー（Speer）への手紙でも、北里に対する不信感や不快感をあらわにしている。また、この手紙には、ヤングマンと好善社との関係が思わしくないことを懸念した東京の宣教団が、ヤングマンの報告書をそのまま米国伝道局に送付しないことに腹を立てているヤングマンの様子もよく表れている。さらに、最後の方には、これまでの手紙にもよく見られたが、伝道のための人材が不足しているのであらたにバイブルウーマンや宣教師を雇用してほしいと要請しているが、いつも資金不足で断られると嘆いている（後年のヤングマンに関する資料は殆ど存在せず、この手紙は貴重な資料と思われるので、全文を翻訳する）。

1904年3月22日

スピアー様

私が長い間便りを出さないのご不満というお手紙をいただきました。同じ頃にいろいろな方から手紙をいただきましたが、乗り越えなければならぬ困難な状況に際して、私を励ましたり勇気を与えてくれるものは全くありませんでした。でも、天にいます我らの父はすべてを知っていますし、私を支え、励ましてくださいます。それで、私はもらった返事のために落胆していましたが、今はなんとかそれも乗り越えることができている。

今年は宣教団に報告書を出していないので不思議に思っていることでしょう。多分、私の報告書が宣教団によって削られたり、修正されるとすれば、今後私は報告書を一切提出するつもりはないと知って、もっと驚かれることでしょう。

昨年ピアソン夫人がミッション・レター [のコラム] を担当することになりましたので、私は私の報告書をピアソン夫人に送りました。ところが、彼女は自分が一番いいと思うところだけ選び出し、それを宣教団に送ったのです。[一方、] インブリー博士は彼女が抜粋した箇所を私に送ってきて、米国伝道局が、ハンセン病者救済を行っている好善社と宣教団の間に問題があると思う恐れがあるとマコリー夫人が主張している箇所があるので、その箇所を削除してくれないかと言ってきたのです。私は、その箇所を削除する必要はないと思いましたので、お断りいたしました。そうすると、宣教団は勝手に私の報告書からその箇所を削除してしまいました。その箇所というのは、以下のことです。

「北里博士が我々の患者を治療するようになって3年が経ちましたが、ミス・ヤングマンは改善が見られるどころか、北里博士が治療を始めたために、彼らの病気は悪化してきているように感じています。慰廢園が発足した時に、ジェームズ・バラ宣教師が名づけた通り、まさに、「不治の病人ホーム (Home for Incurables)」なのです。MTL 創始者ベイリー氏が「私が知る限り、世界で治ったというハンセン病者はいない」と言っていたことも思い出されます。長老教会の福音宣教師だった人が、ハンセン病の症状を和らげたり、初期のハンセン病を治す薬を持っていると言っていました。毎日、沢山の人が押し寄せています。症状はかなりよくなっているようですが、治癒したのかどうか判断する時間がまだ十分に経過していません。

三

北里博士は、この薬を慰廃園で使いたがらないのです。そのため、ミス・ヤングマンは、その薬の効果を調べるために慰廃園の専属医師である北島医師を送りました。彼女はその薬を患者に試してみるつもりです。」

いかがですか、この中には修正しなければならない箇所などありませんよね。ですから、宣教団が私の原稿を変更したり、削除するようなことがあるのならば、私はもう一切報告書を宣教団には送りません。変更や削除されるようなことになれば、それはもう私の報告書ではありません、宣教団の報告書なのです。宣教団は自分たちの報告書を書いていけばいいのです。好善社は、異教徒の北里という医師と提携したために、以前のように神の祝福を受けることができなくなりました。新しい建物ができたのですが、この1年間〔新たな〕収容者は一人もいません。申込者は沢山いるのですが、世話をする資金がないので引き取ることができないのです。

以前ならば、すぐにこの建物が患者で一杯になるように病者を引き受けるべきだと思ったでしょう。でも、今は、異教徒とともに仕事をしているために、資金の段取りができるとは思えないのです。これは、私の30年間の伝道生活で初めての経験です。私はどうすることもできませんので、神様が私の祈りを聞き入れて、これらの異教徒の医師たちをキリスト教徒にしてくださるか、彼らを慰廃園から追い出してくださることでしょう。私は、日本に来る時に言われた通りのことができずに、婦人伝道局に申し訳なく思っていますし、あなたもまた伝道局もこのことが正しいことであることを理解して下さることと思います。

恐ろしい戦争が始まっています〔注・日露戦争〕。私たちは精一杯のことをしています。私は、日本人の働き人を雇用する件、このことは常日頃から私が宣教団にお願いしています。まだ聞き入れてもらえない案件に関して、もう少し書きたいと思います。私が日本に戻ってきて5年が経ちました。毎年もう一人バイブルウーマンを、もう一人宣教師を雇用してほしいとお願いしているのですが、いつも資金不足と言う理由で断られます。学校運営のためにはいつも資金があって、伝道には資金がないのです。でも、もうこのへんで〔この手紙を書くのは〕やめておきます。敬具 ケイト・M・ヤングマン<sup>57</sup> (筆者訳)

三 慰廃園の新築の建物は、上記のヤングマンの手紙にあるように、空き家状態にあったのだろう。一方、東京市養育院では、ハンセン病患者の



数が増加し、全員を収容することが困難となったため、市長宛てに困窮を訴え、対策を講じてほしいという要望を述べた上申書を提出したが、東京市から何の返事もなかった。そのため、1904年6月養育院は慰廃園に患者委託を申し出た。慰廃園では協議したうえ、以下の回答書を養育院長洪沢栄一に送った。<sup>58)</sup>

貴院御収容癩患者今回本院へ収容方御委託ニ付テハ貴院ニ於テハ壱人(ひとり)ニ付一日費用金弍(に)拾銭ノ御予算ナル由然(しかる)ルニ本院ニテハ壱人ニ付一日ノ費額金三拾銭ノ予定ニ為有之此間小少ナラザル相違有之候得共貴院御経費ノ都合モ可有之ト存候間差シ当リ御予定ノ費額ニヨリ直ニ収容方御依頼ニ相応シ可申候乍併弊院経費ノ都合モ有之候ニ付テ相成ハ御詮議ノ上御増額被成下候ハゞ有難仕合ニ在存候右及御回答候也

明治37年6月16日

院長北島剛三

監督大塚正心

東京市養育院長男爵洪沢栄一様

Ibid., p.80.

この手紙は、養育院の患者一人当たりの一日の経費が20銭であるが、慰廃園では30銭<sup>59)</sup>なので、さしあたり20銭で直ちに患者を収容したいと思うが、なるべく一人当たり30銭の金額を支払ってほしい、という回答である。おそらくこの件については何らかの解決がされたのであろう。同年7月1日より10名の患者が養育院より委託されることになった。

ヤングマンは、1899年(明治32)慰廃園が病院組織になった頃から指導的な立場からは退き、会計や会計調査委員、伝道委員、建築委員などのような後方支援的な働きに代わり、好善社を主導するのは和田秀豊などであった。<sup>60)</sup> ヤングマンは、矯風会における娼妓救済活動の開始のときに見られたように、日本の問題は日本人が解決すべきであるという考えを持っていたことを思うと、ヤングマンが後方支援の役割を担うよう

言

になったことも納得できる。<sup>61)</sup>

好善社は1905年（明治38）3月22日社団法人の認可を受ける。ヤングマンは10名の理事の一人であったが、筆頭理事は米国オランダ改革教会宣教師マーチン・ワイコフ博士（Martin Nevius Wyckoff, 1850-1911）であった。1909年（明治42）1月23日の短い手紙で、ヤングマンは好善社に退社を願いでる。<sup>62)</sup>

このような状況ですので、私は好善社を退社せざるを得ないという気がします。今後とも機会があればいつでも、この仕事を援助することは、私の変わらぬ喜びであり、好善社の発展のために熱き祈りを捧げようと考えております。この働きについている皆様の上に神の祝福がありますように。Ibid., p.117.

## (2) ヤングマンの死

ヤングマンは67歳であった。年齢が増して、病気がちになったのだろうか。この手紙を書いた時には確かに体調は良くなかったと思われる。好善社では、ヤングマンの退職願にすぐには回答をださず、1年後の1910年2月14日の総会でヤングマンの退社を承認する。

ヤングマンは、同年夏、御殿場に静養に出かけたが、9月17日より病床についたので、東京の赤坂病院ホイットニー博士<sup>63)</sup>のもとに運ばれた。居心地の良い病室で十分な治療を受けたが、回復することはなく、衰える一方であった。親しい友人たちの看病を受けながら、大して苦しむ様子もなく、最後の日にはバラ夫人に埋葬の準備を頼んだり、葬式は生涯敬慕していたタムソン師の司式にしてほしいと言い残して、9月29日息を引き取った。68歳だった。臨終の言葉は、信仰深いヤングマンをよく表している：「すべては神の御意です。私は神が万事を益となるようにして下さることを知っています。」ヤングマンの葬儀は10月2日新栄教会において執り行われ、葬儀の様子は『福音新報』明治43年（1910）10月6日号に掲載された。<sup>64)</sup>

葬儀は、ヤングマンの希望通り、タムソン師の司会にて、聖書朗読、

祈り、会衆一同の讃美歌斉唱と主の祈り、ヤングマンの履歴の紹介などが行われたのち、女子学院の生徒数名が賛美歌を歌い、バラ宣教師が英語で祈りを捧げ、その後、棺は数名の内外人に擁せられて、馬車で染井霊園に向かい、墓地に葬られた。会葬者は200名ほどで、外国人が多かったという。

画像3. 豊島区染井霊園にあるケイト・ヤングマンの墓



出典：好善社（1978）『ある群像：好善社100年の歩み』, p.3.

画像4. ヤングマンの葬儀の様を伝える「ヤングマン女史の葬儀」、『福音新報』、明治43年10月6日の記事



## おわりに

本論で明らかにしたように、ケイト・ヤングマンは、ボランティアグループ「好善社」の活動としてハンセン病者救済活動を行った。ヤングマンの休暇帰国中に、「好善社」は北里柴三郎の患者を受け入れることになり、東京府から病院の認可を受けた。新築の建物ができたが、資金がないので建物は空屋状態であった。1904年東京市養育院からのハンセン病患者の委託の依頼を受け、引き受ける。園内は園内患者と委託患者の雑居する療養施設になった。慰廃園はヤングマンが構想していたキリスト教徒のみで運営を行い、キリスト教徒病者のみを受け入れていくキリスト教療養施設にはならなかった。ヤングマンは、一時期「好善社」の運営から退くが、その後は1909年に体調が悪くなるまで「好善社」とどまり、後方支援的な仕事をして慰廃園の運営に関わる。ヤングマンの逝去後は、ヤングマンの意志を引き継いだ大塚正心・かね夫妻やほかの職員が献身的な奉仕を続けたが、日本政府の意向により1942年8月解散させられ、患者はすべて国立ハンセン病療養所全生園に収容された。

## [注]

- 1) Youngman, David, M.D. (1882) *Genealogy and Biographical Sketches of the Youngman Family*, pp.16-17, Press of George H. Ellis: Boston.
- 2) 1850 United States Federal Census.
- 3) 履歴書には、たしかに、Was to have been married at eighteen, but the gentleman to whom I was engaged was killed in the war at the battle of Anteatam. と書かれているが、「アンティタムの戦い」は、1861年9月17日に起こっており、1861年12月17日の誕生日まで、ヤングマンは19歳で、18歳ではない。
- 4) 履歴書には、たしかに、At twenty-one I returned to school and in four years graduated from the 12<sup>th</sup> Street school, now the

Normal College. Was appointed in the same school in 1869, the same year I graduated.とあるが、4年で卒業したとすれば、卒業年は1867年である。1869年に卒業したのであれば、6年間在学したことになる。在学中に2年間休学していたとも考えられる。

- 5) 1869年、亡夫の友人である米国オランダ改革教会宣教師 J・H・バラは休暇で日本から帰国していた折、プラインを訪問。プラインの熱心な慈善事業の活動に感動したバラは、当時横浜での混血児童の増加がキリスト教伝道の妨げとなっていたので、プラインに日本に宣教師として来て、混血児童の養育をするよう依頼する。プラインは、婦人一致海外伝道局 (WUMS) から3人の女性宣教師の一人として来日する。安部純子 (2000) 『ヨコハマの女性宣教師：メアリー・P・プラインと「グランドママの手紙」』, pp.159-163, EXP: 東京.
- 6) メアリーは、1838年オランダ系米国人サムエル・プラインと結婚。1862年夫サムエルは病死。この時42歳のメアリー・プラインは、自分に残された年月をクリスチャンとしての奉仕に捧げる決心をする。
- 7) *Albany Morning Express*, May 20<sup>th</sup>, 1871.
- 8) 履歴書には、4つの伝道局とあるが、小檜山ルイは、3つの伝道局とし、それらは、婦人一致海外伝道局 (WUMS), 改革教会伝道局, 長老教会海外伝道局としている。また、長老教会では伝道局ではなく、ニューヨークの婦人伝道局を率いるジュリア・グレハムがヤングマンと直接交渉をし、両者の間に固い信頼関係が形成されたと記している。小檜山ルイ (2005) 「ケイト・ヤングマン：築地とともにあった独身婦人宣教師」, 『築地居留地 vol.1』, pp.40-47, 築地居留地研究会：東京.
- 9) 大濱徹也 (1985) 『女子学院の歴史』, p.44, 女子学院：東京.
- 10) ニューヨーク長老教会婦人伝道局では1873年4月日本進出直後から日本伝道に要する資金を5,400ドルと設定し、献金を募り、かなり

云

早い時点で目標金額に達した。ヤングマンは、この資金の一部3,000ドルを使って、築地新栄町42番地に土地を購入し、校舎を建設する。婦人伝道局は、3人の宣教師、30人の寄宿生、多数の通学生を収容できる学校の建設を希望していたので、おそらく、そのくらいの規模であったと思われる。小檜山, op. cit.

- 11) 好善社『ある群像：好善社100年の歩み』, pp.46-47, 日本基督教団出版局：東京。佐藤の名前は「佐藤む免子」と表記されているが、「佐藤梅」のことと思われる。
- 12) 大濱, op. cit., p.146. ヤングマンは、1878年（明治11）6月3日築地新栄町5丁目7番地に第1啓蒙小学校、翌79年には芝区愛宕町に第2啓蒙小学校を設立し、貧困家庭児童に読み書きや手芸を教えた。第1啓蒙小学校は、1886年（明治19）12月奥平浩が尋常科定員80名の啓蒙小学の設立願いを東京府に提出している。第2啓蒙小学校は、1879年（明治12）4月笠井大五郎によって届けられた。大濱, op. cit., pp.128-129.
- 13) 好善社, op. cit., p.44.
- 14) Ibid., p.127.
- 15) 大濱, op. cit., p.127. クララ・ホイットニーの日記1879年2月27日には、「おひなさんは上杉氏とうまくいってなくて別れたがっているとのこと。日本人の妻はけっして離婚を求めることはないのです、これはまったく新しいことである。築地で外国人について勉強したからだと言われている。」とある。同日の日記に、大鳥ゆきについて「おゆきさんはお友達の渡辺おやすさんのお兄様と婚約している。」と書かれている。クララ・ホイットニー（著）一又民子 et al.（訳）（1996b）『勝海舟の嫁 クララの明治日記 下』, p.145, 中公文庫：東京。大鳥姉妹の母親は1878年（明治11）死去、2月5日に葬式が行われるが、ヤングマンが参列している。クララ・ホイットニー（著）一又民子 et al.（訳）（1996a）『勝海舟の嫁 クララの明治日

記 上』, p.489, 中公文庫:東京. 工部美術学校が1876年(明治9)に開校するが, 明治11年(1878)教師であったフォンタネージ送別記念写真に大鳥ひながいる。フォンタネージは同年9月に辞任。授業はフランス語で行われていた。『明治時代館』(2005), p.234, 小学館:東京. 1879年(明治12)5月29日のクララの日記には「おゆきさんは大変危険な肝臓の病気でとても悪そう。青白くてやせてもう長いとは思えない。」とあり, 1882年(明治15)大鳥ゆきは永眠。クララ・ホイットニー(著)一又民子 et al.(訳)(1996b), op. cit., p.229; 好善社, op. cit., p.376.

- 16) 好善社, op. cit., p.44. 上杉茂憲は, 出羽米沢藩第13代(最後)の藩主である上杉茂憲と思われる。上杉は1871年廃藩置県により, 東京に出る。1881年沖縄県令兼判事に任命される。県令の月俸は200円であった。しかしながら, 上杉茂憲の年譜には, ひなとの結婚は記録されておらず, 上杉の年譜では1875年16歳の兼という女性と結婚し, 1876年11月26日長男憲章が誕生している。
- 17) Ibid., p.44.
- 18) Ibid., p.127.
- 19) Ibid., p.44.
- 20) 大濱, op. cit., p.147.
- 21) 好善社, op. cit., p.45.
- 22) Ibid., pp.44-45.
- 23) 1886年に第1啓蒙小学校の正式な届けが出される前は, 好善社の社員が教師を行っていたと思われる。
- 24) 『七一雑報』, 1879年(明治12)11月7日.
- 25) 大塚かね(談)・宮川量(筆記)(1935)「不滅の榮光」, pp.7-8, 『愛生』, 第5巻, 第5号, 昭和10年5月.
- 26) 好善社, op. cit., p.372.
- 27) Ibid., p.66.

- 28) この提案は、実際のところ、改革派とアメリカン・ボード（会衆派）との間の合同協力の話し合いが進められただけで、しかも、両者間において最終的な一致が得られず、合同組織としての日本基督公会は成立しなかった。その結果、改革派は長老派との協力によって1877年10月3日日本基督一致教会結成、1891年11月日本基督教会として出発。アメリカン・ボード系の諸教会は1886年4月日本組合基督教会を組織することになった。『日本キリスト教歴史大事典』、教文館：東京。
- 29) 大西米三（1972）「神山講義所沿革史」、『八十八年の歩み』、日本キリスト教団御殿場教会：静岡。
- 30) ゲーグルマップ上で、車で神山から御殿場までの距離である。時間にして15分かかる。
- 31) 米国オランダ改革教会宣教師。
- 32) 日本基督教会牧師。
- 33) 大西, op. cit., pp.14-19.
- 34) テストヴィード神父は1849年フランスのマルス県で生まれる。ラングルの神学校で学び、またパリ外国宣教協会神学校を卒業。1873年に来日。1891年香港ベタニアの園にて病死。
- 35) 林富美子（1989）「テストヴィード師と盲人のらい女」、『カトリック生活』、5月号、ドン・ボスコ社：東京；復生病院（1969）*In Commemoration of the 80th Anniversary*. この女性は神父より洗礼を受け、モニカと名づけられるが、1891年5月10日16歳で永眠した。
- 36) 百年史編集委員会（編）（1989）『神山復生病院の100年』、春秋社：東京。
- 37) 『富士岡村誌』（復刻版）（2001）、p.175、御殿場市役所富士岡支所：静岡。
- 38) 大西, op. cit., pp.18-19.



- 39) ガントレット恒 (1990)『七十七年乃想い出』, p.14, (初版:1949, 植村書店), 大空社:東京.
- 40) Ibid., p.12. 淵真吉『この道:山田耕笹伝記』の101ページに, かねは1883年(明治16)ヤングマンが築地新栄町に設立した「女子伝道学校」に入学し, 1888年(明治21)4年間の修業年数を終了し, 「女子伝道学校」の第1回卒業生として同校を卒業したと記されている。また, かねは, 1885年(明治18)後に音楽家となる一人息子淳(すなお)を出産しているので, 育児をしながらの学業生活であったとあるが, 第1回卒業生4名の中には大塚かねの名前はない。淵は, 山田耕笹の語った話として, 記述したと思われるので, 山田耕笹の記憶違いの可能性が高い。
- 41) 大塚, op. cit., p.7.
- 42) Ibid.
- 43) 『日本キリスト教歴史大事典』, op. cit.
- 44) 好善社, op. cit., p.69. MTLからの最初の送金がいくらであったかは諸説がある。大塚かね(談)は250ポンド, 『ある群像』69ページによると, 「明治27年(1894)2月10日の例会では, 約束してあった金額の1部200ポンドが送金された。」と記されている。和田秀豊「救癩四十五年」では, 「そのころ, 英国の癩救済会員のペリイという人が東京に来られ, 我々どもの企てに賛成されて, 金二千円を寄付せられしにより, 明治27年(1894)9月に私が好善社を代表して目黒に三千余坪の地所を買い入れ, 家屋を設立して之を慰廢園と命名いたしました」と記述されている。和田秀豊(1939)「救癩四十五年」, 『医事公論』, 1381号, 昭和14年1月, 医事公論社:東京.
- 45) Miller, A. Donald (1965) *An Inn Called Welcome: The Story of the Mission to Lepers 1874-1917*, p.80, The Mission to Lepers: London.
- 46) 好善社, op. cit., p.69.

- 47) Ibid., p.72.
- 48) Ibid., pp.73-74.
- 49) (1845-1909) 1845年6月敦賀(つるが)に生まれる。1877年内務省より内科・外科医術開業免状を請け、京都府の療病院医局員、外務省御用係、東京の赤坂病院などの職を経て、慰廃園発足と同時に同園に勤務。1881年に日本基督教会芝教会にて受洗し、教会員となり、さらに、1884年以後、同教会の長老としての務めを果たした。好善社が社団法人となった後は、亡くなるまで理事として在任した。Ibid., p. 120.
- 50) Miller, op. cit., pp.80-81.
- 51) 元娼妓たちは、今では、誠実で信頼できる女性になったと記している(1894年1月22日伝道局への手紙)。矯風会の慈愛館が大久保にできるのは1900年なので、その頃までは元娼妓を預かっていたと思われる。
- 52) ヤングマンは震災孤児を大層可愛がっていたようで、子供たちの養育は喜びであり光栄でもあり、子供たちも彼女を愛してくれている、と記している(1898年8月29日伝道局への手紙)。
- 53) Ibid., p.82.
- 54) 和田, op. cit.
- 55) 好善社, op. cit., pp.76-78.
- 56) Ibid., p.78.
- 57) ヤングマンのこの手紙に対し、伝道局のスピーアーは非常に同情的で丁寧な返事を1904年4月26日付けで送っている。
- 58) 好善社, op. cit., p.80.
- 59) 1人あたり、1カ月9円、1年で108円である。
- 60) 好善社, op. cit., p.115.
- 三 61) 矢島楯子の回想によれば、「越えて明治21年(1888)の例会に、ミス・ヤングメンが叫んで、矯風会が成立った以上は、どうしても救

済館が設けられなくてはならぬ。私共もできるだけお手伝いするが、日本の事情に鈍いから、金を募集する事をお引請けして、あなた方に適当な方法を講じて頂きたい。困難な事業には違いないが、神様が後ろにあるから必ずできる。」と言われたとある。矢島楫子(1915)「貞操問題の淵源(えんげん)」、『婦人新報』, 1916年12月号, pp.1-3.

62) 好善社, op. cit., p.117.

63) Willis Norton Whitney (1855-1918) クララ・ホイットニーの兄。1875年父親が御用教師となり、一家揃って来日。82年父はロンドンで客死。母は83年日本で病死。赤坂病院は母の遺志により、亡父母に寄せられた日米人の香典で建てたもので、いずれの教団にも属さなかった。

64) 好善社, op. cit., p.115.

## 参考図書

### 日本語図書

安部純子(2000)『ヨコハマの女性宣教師：メアリー・P・ブラインと「グランドママの手紙」』, EXP:東京.

大塚かね(談)・宮川量(筆記)(1935)「不滅の榮光」, 『愛生』, 第5巻, 第5号, 昭和10年5月.

大西米三(1972)「神山講義所沿革史」, 『八十八年の歩み』, 日本キリスト教団御殿場教会:静岡.

大濱徹也(1985)『女子学院の歴史』, 女子学院:東京.

ガントレット恒(1990)『七十七年乃想い出』, (初版:1949, 植村書店), 大空社:東京.

クララ・ホイットニー(著)一又民子 et al.(訳)(1996a)『勝海舟の嫁 クララの明治日記 上』, 中公文庫:東京.

クララ・ホイットニー(著)一又民子 et al.(訳)(1996b)『勝海舟の

嫁 クララの明治日記 下』, 中公文庫: 東京.

好善社 (1978) 『ある群像: 好善社100年の歩み』, 日本基督教団出版局:  
東京.

神山復生病院百年史編集委員会 (編) (1989) 『神山復生病院の100年』,  
春秋社: 東京.

御殿場市 (2001) 『富士岡村誌』 (復刻版), 御殿場市役所富士岡支所:  
静岡.

小檜山ルイ (2005) 「ケイト・ヤングマン: 築地とともにあった独身婦  
人宣教師」, 『築地居留地 vol.1』, 築地居留地研究会: 東京.

林富美子 (1989) 「テストヴィド師と盲人のらい女」, 『カトリック生活』,  
5月号, ドン・ボスコ社: 東京.

淵真吉 (社団法人日本楽劇協会: 編) (1982) 『この道: 山田耕筰伝記』,  
恵雅堂出版: 東京.

矢島楯子 (1915) 「貞操問題の淵源 (えんげん)」, 『婦人新報』, 1916年12  
月号.

和田秀豊 (1939) 「救癩四十五年」, 『医事公論』, 1381号, 昭和14年1月,  
医事公論社: 東京.

## 新聞

『七一雑報』, 1879年 (明治12) 11月7日.

「ヤングマン女史の葬儀」, 『福音新報』, 明治43年10月6日.

## 事典

小学館 (2005) 『明治時代館』, 小学館: 東京.

教文館 (1987) 『日本キリスト教歴史大事典』, 教文館: 東京.

## 英文図書

神山復生病院 (1969) *In Commemoration of the 80th Anniversary.*

元 Miller, A. Donald (1965) *An Inn Called Welcome: The Story of the  
Mission to Lepers 1874-1917*, The Mission to Lepers: London.

Youngman, David, M.D. (1882) *Genealogy and Biographical Sketches of the Youngman Family*, Press of George H. Ellis: Boston.

ヤングマンの手紙

1904年3月22日 ヤングマンからスピーアーへ.

1878年9月20日 ヤングマンからローリー博士へ.

Presbyterian Church in the USA Board of Foreign Missions.

*Mission Correspondence and Reports (microform), 1833-1911.*

(マイクロフィルム)

米国国勢調査1850年

1850 United States Federal Census.

新聞

*Albany Morning Express*, May 20<sup>th</sup>, 1871.

